

■レポート

2015年第7回台北国際中医薬学術フォーラム



第7回台北国際中医薬学術フォーラムが、3月14,15日、例年通り台北市の台大医院国際会議センターで開催された。台湾とつき合い始めて5回目のフォーラムである。今年も大陸からの参加者が目立った。台湾と大陸の交流が年々活発になっている様子が見て取れる。

われわれにも馴染みの深い『[詳解] 中医基礎理論』(東洋学術出版社刊)の著者・劉燕池先生も特別講演をされた。劉燕池教授は、長年北京中医薬大学基礎医学院の院長を務めた中医基礎理論の専門家であり、それだけに60年来の基礎理論の歴史をどう総括されるのか、氏の講演が注目された。氏は「この半世紀以上、大陸では『中医の現代化』に大きな力を注いできたが、成果は微々たるものだった。西洋医学の方法論と標準を参照して、ただ上っ面を飾る文章を書いたにすぎない。現代研究の成果と臨床の実際は結合できていないし、中医学の理論と連携させることもできていない。明らかに手詰まり状況だ。」と率直な見解を述べた。

台湾の代表的学者であり、現在アメリカ・カリフォルニア中医薬大学で教鞭を

取る楊維傑教授が「針灸の鍵——易卦と河洛」と題して特別講演を行った。易理と針灸の関係性を詳細に解説して、会場全体を埋め尽くす大勢の聴講者たちがこれを熱心に聞き入っていた。会場からは次々に質問が出され、台湾の針灸界で易理への関心が非常に高いことが伺われた。同氏は『董氏奇穴針灸学』を著して「董氏針灸」を世界に普及させた立役者である。「董氏針灸」については、台湾出身でカナダ在住の鐘政哲先生から昨年詳しくご説明いただいたインタビュー記事が本学会ホームページに掲載されているので参照されたい。

<http://www.jtcma.org/news/img/2014.4.pdf>

楊維傑先生は本大会のあと 4 日間にわたって「董氏針灸」の集中講座の講師を勤められた。

大陸の主な講師たちは、2 日間の大会終了後に 1 日から 4 日間ほどかけた集中講座を受け持つ。われわれはこれらの個別講習会には参加していないので講習会の様子はよくわからないが、時間をかけたそうとう突っ込んだ討論が行われているようだ。

今年、日本からは総勢 14 名が参加、平馬直樹会長が「江戸時代の口訣医学——津田玄仙の医学」と題する講演を行った。

日本代表団は、今年は台北市から新幹線で 1 時間ほどの台中市まで足を伸ばし、台湾の最大の中医薬大学である中国医薬大学を訪問した。楊永賢教授の案内で学内を参観した。その後、同大学の林伯欣準教授にお目にかかり、別載のような談話をうかがった。

(文責：山本勝司)



劉燕池先生(右)



楊維傑先生(中)



特別講演をした平馬直樹
学会会長



中国医薬大学(台北市)



大学をご案内してくださった楊永賢教授と日本代表団のメンバー